

毎月11日掲載

防災・減災のページ

第74回ワークショップ @東松島、宮城・女川

むすび塾

高橋さんは当時大曲小4年。同校に迎えに来た両親と会えたが、母親が産前産後で両親が荷物を取りに帰宅してしまい、犠牲になったという。「どうして助けられなかったのかと自責の念に駆られる」と高橋さん。「津波が起きそうなる時、大切な人が自宅に戻ろうとしたら無理でも引き留めてほしい」と訴えた。

一行は女川町にも向かい、震災時の津波到達点より高い位置に建てた後世への教訓として石碑を見学した。

女川中卒業生のグループ「女川1000年後のいのちを守る会」の一員として建立に関わった東北学院大1年渡辺澗大さん(19)が、同町宮ヶ崎の石碑前で経緯を説明。津波犠牲者を繰り返さないように

若き経験者 伝承の力に



「女川いのちの石碑」の前で建立に込めた思いを伝える渡辺大さん(左端)＝宮城県女川町宮ヶ崎



震災の伝承に向け、若い経験者世代の役割を話し合った＝女川町まちなか交流館

【語り継ぐために】震災経験者の語り部活動をしているが、私たちは子ども時代に被災したから、その話ができる。大人の語り部とは少し違うものがあると感じる。伝え方も語りだけでなく絵本や漫画、演劇など、若い世代だからこそ伝えられる方法もあると思う。石巻市桜坂高2年・武山ひかるさん(17)

【語り継ぐために】震災経験者の中でも世代ごとに役割があると思う。私たちは震災を忘れてはいけない。震災でどんなことが起きたかを伝えていかなければならない世代。分からないのなら話を聞いて学ぶ。そうして学んだからこそ伝えられることもあるはずだ。名取北高3年・砂口優美子さん(17)

【参加して】津波で家族や自宅を失った同世代が、勇気を持ち体験を語り継ぐという強い思いがなければ、被災経験のない自分にもできることはあるはずだ。多くの生徒が心を一つにして、まずは今回学んだことを学校で報告したい。多賀城高1年・佐々木駿斗さん(16)

【参加して】被災地に行つて話を聞き、初めて知ることが多くあった。被災はしていないが、経験の無い関係ない。同じ宮城県民として震災の事実を学び、後世に伝えるべきだと感じた。看護師を目指しており、被災者の心をケアできるような災害医療の学びも深めたい。築館高3年・松井若菜さん(18)

【災害に備えて】震災の教訓を次の世代に伝えるのが大事。中学生向けに作った「女川いのちの教科書」の改訂版、小学生版を作り、内閣府や海外にも広めたい。自分たちの震災伝承活動は周囲の大人に支援されてきた。今後は支える側にも回り、活動の発信などを担いたい。東北学院大1年・渡辺澗大さん(19)

【語り部グループ「TSUNAGU Teenager Tour guide」のメンバー、宮城水産高(石巻市)2年高橋さつきさん(17)は、津波で流された東松島市大曲浜地区の自宅跡地に生徒らを案内し、両親と祖父を亡くした状況を語った。

高橋さんは当時大曲小4年。同校に迎えに来た両親と会えたが、母親が産前産後で両親が荷物を取りに帰宅してしまい、犠牲になったという。「どうして助けられなかったのかと自責の念に駆られる」と高橋さん。「津波が起きそうなる時、大切な人が自宅に戻ろうとしたら無理でも引き留めてほしい」と訴えた。

一行は女川町にも向かい、震災時の津波到達点より高い位置に建てた後世への教訓として石碑を見学した。

女川中卒業生のグループ「女川1000年後のいのちを守る会」の一員として建立に関わった東北学院大1年渡辺澗大さん(19)が、同町宮ヶ崎の石碑前で経緯を説明。津波犠牲者を繰り返さないように



津波被災した自宅跡地で当時の状況を語る高橋さん(左から3人目)＝東松島市大曲浜地区

【参加して】津波で家族や自宅を失った同世代が、勇気を持ち体験を語り継ぐという強い思いがなければ、被災経験のない自分にもできることはあるはずだ。多くの生徒が心を一つにして、まずは今回学んだことを学校で報告したい。多賀城高1年・佐々木駿斗さん(16)

【参加して】被災地に行つて話を聞き、初めて知ることが多くあった。被災はしていないが、経験の無い関係ない。同じ宮城県民として震災の事実を学び、後世に伝えるべきだと感じた。看護師を目指しており、被災者の心をケアできるような災害医療の学びも深めたい。築館高3年・松井若菜さん(18)

【災害に備えて】震災の教訓を次の世代に伝えるのが大事。中学生向けに作った「女川いのちの教科書」の改訂版、小学生版を作り、内閣府や海外にも広めたい。自分たちの震災伝承活動は周囲の大人に支援されてきた。今後は支える側にも回り、活動の発信などを担いたい。東北学院大1年・渡辺澗大さん(19)

高校生ら視察・語り合い

語り部グループ「TSUNAGU Teenager Tour guide」のメンバー、宮城水産高(石巻市)2年高橋さつきさん(17)は、津波で流された東松島市大曲浜地区の自宅跡地に生徒らを案内し、両親と祖父を亡くした状況を語った。

高橋さんは当時大曲小4年。同校に迎えに来た両親と会えたが、母親が産前産後で両親が荷物を取りに帰宅してしまい、犠牲になったという。「どうして助けられなかったのかと自責の念に駆られる」と高橋さん。「津波が起きそうなる時、大切な人が自宅に戻ろうとしたら無理でも引き留めてほしい」と訴えた。

一行は女川町にも向かい、震災時の津波到達点より高い位置に建てた後世への教訓として石碑を見学した。

女川中卒業生のグループ「女川1000年後のいのちを守る会」の一員として建立に関わった東北学院大1年渡辺澗大さん(19)が、同町宮ヶ崎の石碑前で経緯を説明。津波犠牲者を繰り返さないように

むすび塾に参加して



TTT 全国各地で講演 ■ いのちを守る会 16基の石碑建立

TTTは、東松島市で震災を経験した女子高校生が2015年5月に結成した語り部グループ。現在、震災時小学6年だった女子大学生4人と、小学4年だった女子高生2人が活動している。

主な取り組みはかつてメンバーの自宅があった同市野蒜、大曲浜両地区の現地ガイド。ボランティアや学生団体

を案内して津波被災や避難の体験を語り、命の大切さを訴える。講演依頼も多く、17年は北海道から熊本県まで全国20カ所以上で体験を伝えた。

女川1000年後のいのちを守る会は、宮城県女川町の女川中卒業生のメンバーで活動する。震災時の津波到達点より高い地点に「女川いのちの石碑」(高さ約2.5m、幅約1.5m)を建て、「逃げない人がいても、ここまで無理やりにも連れ出してください」と刻んで教訓を次代につなぐ。

町内に21ある全ての浜に建てる計画で、13年秋の女川中を皮切りにこれまで16基設置。総額1000万円と見込む建設資金は、各地で募金活動を展開して工面している。

震災の教訓などを盛り込んだオリジナルの「女川いのちの教科書」作りにも力を入れ、教育現場での普及・活用を目指す。進学や就職で地元を離れたメンバーもいる中、定期的に会合を重ね、古里を拠点に伝承活動を続けている。

被災の有無は関係ない

東松島市矢本二中教頭 阿部 一彦さん(51)

震災時は女川中(女川町)の教員だったが、教員を亡くしている。若い世代が震災のことを伝えたいと思ってくれていくことに心から感謝したい。

中には「被災者でないから」と語ることをちゅうちょしている人もいます。でも自分が被災したかどうか、直接震災を経験したかどうかは全く関係ない。

この震災は1000年先まで語り継がなければならない。体験者が語れないのであれば、広島原発体験も今は誰も知らない話になる。知らなかったら聞けばいい。若い立場から話したいことを話してほしい。

語れることを語る 大事

東北大 災害科学国際研究所助教 定池 祐季さん(38)

中学2年生の時、北海道奥尻島で北海道南西沖地震に遭った。自宅は無事だったが、198人が犠牲になった。いま島では「災害は終わったこと」とされ、行政の追悼行事もなくなった。自身の体験を語る語り部は「語れることを語る」。長い人生で、悩みが多様な世代の人が経験を昇華されることも願う。

「継ぐ」聴いた人の務め

東北大特任教授 斎藤 幸男さん(63)

震災から6年以上たち、若い人が演劇や合唱、語りで表現する力をつけて前に進もうとしている。

震災時の中高生は、目の前のことを乗り越えようとする。先輩の姿を見て、記憶をたどって語れるのが当時の小学4〜6年生。その下になると、記録し、

を読み、学校で習わないと伝わらない。その世代にどう伝えていくかが課題だ。語り継ぎには、自分の気持ちや整理する面と社会的な意味を伝える面の二つがある。「継ぐ」のは聴いた人の務め。「語る」人は、焦らずにゆっくり語ってほしい。